木知原の今昔！

32号：6・2・9

木知原のあゆみ №6

室町時代（南北朝合体後）の木知原

南北朝合体後は金閣寺・銀閣寺・一休さんの時代が80年ほど続いた。

木知原は南北対立の緊張から解放されて平穏なくらしが始まったかに思えたが大きな動きがあった。事例を自作年表に位置付けてみたがうまく伝わるか不安な今号である。

複雑な時代であるので『そんなこともあったのか』の軽い気持ちで一読されたし。

時代の推移（概略）		
鎌倉		
1333		
建武新政		
1336	南北朝	
室	1392	
	1406	
	1427	
	1447	
	1467	
町	戦国の世	
	1525	
	1552	
	1568	
1573		
安土桃山	戦国の世	
1603		
江戸		
1868		

ナヌッ！ 木知原 土岐氏に抵抗？

先ずは下記史料（要約文）を・・・

木知原は応永13年（1406）から文安4年（1447）にかけての約40年の間、京都の藤原四条家の分家である「**鷲尾家**」の所領であった。（大友家文書）

16世紀前半には京都「**勸修寺**」の所領であった。（勸修寺文書）

「外山村は十七丁の田と七町余りの畠があり、**糸**四十両余、八丈**絹**三十四疋、**綿**一千六十両、**和紙**七百帖の所当（税収）があった」（勸修寺文書）

※大永５年（1525）：勸修寺文書の頃はすでに戦国の世が始まっていた

木知原は**土岐頼芸**（よりのり）が**斎藤道三**に**追放**（1552）されるまで土岐氏の支配下が継続していたと思っていたが、史料によると世情の混乱期に京都との結びつきを深めていた。

？木知原はなぜ都（京都教団）と結びついたのか？

外山郷は前々から土岐氏の支配に不満を持ち**年貢の不納**や当時西美濃地区にあった**本願寺教団**の**拝領地区**との結びつきを深める等の抵抗を繰り返していた。そのうちに税を納めるまでに**都**（教団）との関わりを深めたのである。

為政者に物言えぬ農民が集団行動で意思表示する姿は今までには見られなかった事である。お咎めを覚悟の自立（自治）意識の新たな芽生えか垣間見られる。

♡また税が目的とは言え、**糸・絹・綿・和紙**などの換金作物を栽培生産していたことが記録されているのも新しい発見である。

田社神社建立のねらい

田社神社については９～11号で紹介済みであるが、建立の応永**34**年（1447）頃の村は上記のように“一揆でも”といった暮らしであるにもかかわらず神社を建立している。しかも四社全て**こけら葺き**とあるから費用も大変であったのにどこにそのような**パワー**があったのか？

憶測であるが領主に抵抗する自立・団結力をより高めるための心の拠りどころを神社建立に求めたことも一因と思う。以後600余年何度も修理改築を行い今日に至っている。

近づく戦国の世

土岐家への抵抗や神社の建立は南北朝合体から戦国の世までの僅かな期間の出来事である。村人は教団と縁を切り神社も建て“よし！”と意気込んだことでしょう。しかし間近に戦国の世が近づいていたことなど知る由も無かったと思う。